

トビア書

本書は、中に記してある感すべき諸徳の持主、トビアの名を冠して稱ばれ、大なる敬虔、非凡なる忍耐、及び天主の御旨に對する全き忍従の卓れた記録を収めている。彼の謙遜な祈は聽き容れられ、彼を救うため天使ラファエルが遣された。彼は感謝して主を讚美し、イスラエルの子等にも同様にすることを求める。百二歳まで生きながらえた彼は、子や孫に敬虔を勧め、ニヴエの滅亡、イエルサレムの復興を豫言して、幸福な大往生を遂げる。

第一章

トビアの信心生活—トビアの慈善の業、殊に死者を葬ること。

トビア¹⁾はネフタリ族²⁾の人にして、ネフタリ市の出身なり(この市はガリレアの上部ナトソンの上、西の方に至る道の彼方³⁾にありて、セフェトの市を左にす)。彼はアツシリア王サルマナサル⁴⁾の時、代に捕虜となりしが、⁵⁾囚れおる間にも

第一章¹⁾ギリシヤ語のテキストでは、父はトビト、子はトビアとなつている。父にも子にもトビアという同じ名を用いているのはただウルガタだけ。その原形は *Tupina* 「ヤーヴエのいつくしみ」の義。

²⁾この有名なアツシリア王については、王下一七・三以下を見よ。—³⁾サルマナサル(西紀前七四五—七二七)が捕虜として引いて行つたのは、ただネフタリ族の一部だけ。残りはサルゴン(同七二二—七

三 眞理の道を棄てず、^三凡そ手に入る限りの物は、毎日之をその兄弟、同族なる捕虜仲間に分ち與えしほどなりき。^四彼はネフタリ族中の何人よりも年少かりしかど、その行爲にかけては、子供らしき振舞あらざりき。^五五人擧りてイスラエル王イエロボアムの造りし黄金の犢に詣でし時にも、彼獨りは皆の仲間に入るを避け、^六六イエルサレムに行き主の聖殿に至り、其處にて主イスラエルの天主を禮拜し、^七また忠實に己がすべての初物と十分の一とを納め、^七三年目にはその十分の一を悉く新改宗者と他國人とに與えたるほどなりき。^八彼は是等及び類似の事どもを、天主の律法に遵いて少年の頃より守りおりしが、^九成人となるに及びて同族のアンナを妻に迎え、之によりて一子を儲け、それに己が名を與えたり。^{一〇}しかして之に幼き頃より、天主を畏るることと、あらゆる罪を避くることとを教えたり。^二さるほどに彼己が妻子

○五が引いて行つた。
 4) 愛の業に現れる眞の宗教。―王上一二・二八。―5) 律法の命ずる如く、過越、ペンテコステ、幕屋祭の三大節の折に。出二三・一四、一七を見よ。―6) 新改宗者及び他國人はイスラエル諸族の領内に土地を有せず、従つて貧者とされていた。
 の血族の中から娶るのは(勿論禁止の親等を考慮して)、敬虔のしるしと見なされていた

一三 諸共捕われて、同族のすべての者と共に⁸⁾ ニニヴェエの市に到りしが、^{一三}一同は異邦人の食物を食したれども、自身はその魂を守りて、一度も彼等の食物によりて身を漬さず、⁹⁾ 心を盡して主を憶いしかば、天主彼をしてサルマナサル王の眼前に寵愛を得しめ給えり。^{一四} かくて王、何處にても思いのままに行く許可と、何にても欲するままになす自由とを彼に與えければ、¹⁰⁾ 彼、捕われおるすべての人の許に行きて、之に救靈の誠告を與えたり。¹¹⁾ ^{一六} さて彼メデア人の市ラゲス¹²⁾ に至りし時、王より賜わりしものの中、なお銀十タレントを有ちたりしが、^{一七} 同胞の群衆多ある中にも、一族より出でしガベルの貧困なるを見、證書を取りて之に前記の額の銀を

⁸⁾ 自分は敬虔であつたにもかかわらずトピアも天主がエフライムの不信心に對して下し給うた罰である、異郷に引かれる憂目を免かれなかつた。彼に對する天主の御意圖は、その徳を更に積ませるため（聖アンブロジオの説）。
⁹⁾ 他のユデア人は異教國內で極めて實行困難になつた掟は免除されるものと信じていたが、トピアはそれでも相變らずそれを忠實に守つた。——¹⁰⁾ ギリシヤ語によれば、トピアは王の典膳であつた、ちようどネヘミアがペルシヤ王の典酌になつたように。——¹¹⁾ この旅行における彼の意圖は、他のイスラエル人の信仰を強め、彼らを慰めること。
¹²⁾ メデアの首都ラゲスはエクバタナから東へ三百キロの所にある。

一八 與えたり。一八それより時を経ること久しうして、サルマナ

サル王死し、イスラエルの裔等に對して憎悪を抱けるその

子センナケリブ、¹³⁾ 彼に代りて王となるに及びても、¹⁴⁾

一九 トビアは日毎その同族の者を悉く歴訪して、之を慰め、

力の及ぶ限り己が所有物をその各自に分ち與え、²⁰⁾ 飢えた

る者に食せしめ、裸なる者に衣服を贈り、死者と殺されし

者とを懇ろに葬り居たり。¹⁵⁾ 然るにセンナケリブ王、そ

の冒瀆の爲に天主の之に下し給える敗北によりて、¹⁶⁾ ユデ

アより遁れ歸りしかど、怒りてイスラエルの裔等を多数殺

したれば、トビアはその屍を葬れり。¹⁷⁾ 王之を傳え聞く

や、彼を殺さんことを命じ、その全財産を沒收せり。²³⁾ 時

にトビアは妻子と共に身を以て遁れ、隠匿われたり、其は

多くの人々彼を愛したればなり。²⁴⁾ されど四十五日の後、

二四

13) センナケリブは本當は王位篡

奪者サルゴンの子。本文の「子」

は子孫の義。—14) 眞の迫害は敗

北後(二一節)に漸く始まつた。

15) 埋葬せられずにおかれ、野獸

の餌食になるのは、大いなる不

幸で恥辱とされていた。それで

屍體を葬るのは、甚だ賞讃すべ

き愛の業とされていた。耶八・

二。略後五・一〇参照。—16) セ

ンナケリブ軍全滅のことは、賽

三七・三六。代下三二にある。

17) 王下一九・三五。集四八・二

四。略後八・一九。

二五

王は己が子等に殺されしかば、¹⁸⁾ 二五 トビアは己が家に帰り、その全財産を返し與えられたり。¹⁹⁾

第二二章

トビア饗宴の席を去つて死者を葬る―彼盲目となる。

一 さてその後主の或祭日¹⁾に當り、トビアの家にて馳走の用意をしたる時、^二彼その子に云いけるは、「行きて我等の族の中より、天主を畏るる者を數人、我等と共に會食せしめん爲に連れ來れ。」と。^三子乃ち出で行きたるに、また歸り來り、イスラエルの裔等の一人扼殺されて巷に倒れおる由を彼に告げしかば彼直につとその席を立ち、饗筵を後にして飲

¹⁸⁾ 王下一九・三七。代下三二・二一。賽三七・三八。―¹⁹⁾ ギリシヤ語本によれば、宮廷で會計のかしらであつた彼の從兄弟アキアカロスがその返還の執成しをした。

第二章 1) ヴルガタではこの祭日が不明であるが、他のテキストではペンテコステ祭(收穫感謝祭)と名が擧げてある。この祝日には實際喜びの饗宴が催され、貧者もそれに招かれた(申一六・九以下)。

四 食せざるまま屍の許に至り、^四之を抱き上げて私かに己が家に搬び、日沈みなば人知れず葬らんとせり。^五彼その屍を隠したる後、悼みつつ、また恐れつつ、パンを食しけるが、

六 主が預言者アモスによりて曰いし御言を思い出せり、曰く「汝等の祝日は嘆きと哀悼とに變るべし。」^七と。^八七さて日沈むに及び、彼行きて之を葬りぬ。^八然るに近隣の人々舉りて

彼を非難して云いけるは、「既にこの事に由り、汝を殺すべしとの命令出でしことあり、死の宣告を漸く免れしに、汝復

しても死者を葬るか。」^九と。^九されどトビアは王よりも天主を畏れしかば、殺されし者の屍を取り來りて己が家に隠し、夜

中に之を葬りたり。^{一〇}さて或日のこと、彼埋葬に疲れて己が家に歸り、壁の傍に^一身を横たえて睡入りしに、^二その眠

れる折しも、燕の巢より濫かき糞、彼の眼に落ちて、彼盲目

2)ギリシヤ語のテキストでは、トビアが「身を洗い」、かくしてこういう場合命じられていたレヴィ人の齋戒沐浴を、できるだけ實行したと、あとに書き添えてある。民一九・一二以下参照。
 3)歴八・一〇。略前一・四一。
 4)本一・二一。
 5)屍體に觸れた者は、律法によれば不淨であつた(民一九・一一以下)。それでトビアは、自分の家に入り家人に接することを、日暮まで避けたのである。

一三 となれり。一三 茲に主がこの試練の彼に臨むを容し給いしは
 聖なるヨブの如く、その忍耐の模範を後の世に遺さしめん爲
 なりき。一三 蓋し彼は幼き日より断えず天主を畏れて、その誠
 命を守り居たれば、盲目の不幸已に臨みたりとて、天主にか
 一四 こつことなく、一心を動かさず引續き天主を畏敬し、その生
 一五 くる日の限り天主に感謝し居たり。一五 實に王等が福なるヨブ
 を辱しめし如く、親戚、知人等彼の行いを嘲りて云いけるは
 一六 一六 汝が施與と埋葬とをなしたる、その汝の希望は何處にか
 一七 ある」と。一七 されどトビア彼等を戒めて云いけるは、「然云
 一八 うなかれ、一八 蓋し我等は聖者の子⁸⁾にして、天主が、節を變
 じて之より離ることなき者に、賜うべきかの生命を待望む
 一九 なり。」と。一九 茲にその妻アンナは、日々機織る仕事に通い、
 その手を勞して儲け得たるものを生活の料として持ち歸りけ

の鳥類の、殊に昆虫を喰う
 ものの糞、中でもとりわけ
 燕の糞は、石灰分を含んで
 いるせいで稍濕氣があつて
 べたべたしている。詳しい
 テキストによれば、醫者が
 藥を誤用したので、だんだ
 ん盲目になつたのだとある
 の百一及び二兩章参照。聖
 者と福者とは同義語。福者
 とは、天主のために苦しん
 だ義人を特にさす。一⁸⁾ 聖
 者とは特に太祖たちを云う
 また天主の選民も聖なる民
 と稱せられる。出一九・六。
 申七・六参照。

二〇 するが、⁹⁾ 二〇。なおそれに依りて一頭の仔山羊を受け、家に引き来りしことありしに、^三その夫、之が啼く聲を聞きて云いけるは、「戒心せよ。そは盗みしものに非ざるか。之をその主に返せ、盗みし物を食し、或は之に手を觸るるは、我等のなすべからざる事なればなり。」と。¹⁰⁾ ^三是に對しその妻怒りて答えけるは、「明らかに汝の希望は空しくなれり、汝の施與も既に現れたり。」と。¹¹⁾ ^三是等の言その他之に類せる言を用いて、なお彼を責めたり。

第三章

天主トビア及びサラの不幸に逢いて獻げし祈禱を聽き容れ給う。

二一 一時にトビア、涙ながら祈り出でて、^三云いけるは、「主よ 汝は義しくして、汝の審判は悉く義しく、汝の道はすべて憐憫と眞實と正義となり。¹⁾ ^三されば今、主よ、我を憶い給

9) 他のテキストによれば、二年間彼の從兄弟アキアカロス（一・二五の註及び本一・二〇の アキオル参照）が、彼の生活費を準備したが、この寛大な恩人はニニヴェから追放され、エリマイスに流寓したので、あとに残つた彼は大いに窮迫したとある。—¹⁰⁾申二二・一。—¹¹⁾百二・九。

第三章 1) 詩二四・一〇。一一八・一三七参照。

九
え、わが罪に仇を報い給うことなく、わが科をも、またわが父母の科をも、御心に留め給うことなかれ。四そは我等汝の御誠命を守らざりしに由りて、掠奪、捕囚、死などの憂き目に逢わされ、汝が我等を打ち散らして逐入れ給いし異邦人の、語り草及び侮辱の的とせられたればなり。五) されば今、主よ、汝の審判は大いなるかな、そは我等汝の御誠命の如くに行わず、汝の御前に真心もて歩まざりしが故なり。六) されば今、主よ、御旨のままに我になし給い、命じてわが靈魂を安らかに迎え取らしめ給え、蓋しわが爲には生くるよりも死するこそ善ければなり。七) と。七) その同じ日のことなりき、メデア人の市ラゲスにて、ラグエルの娘サラ、その父の婢等の一人より侮辱を受けたり、八) そは娘七人の夫に妻されたれど、アスモデウス) と云える悪靈ありて、彼等が女の許に入るや否や、之を殺したればなり。九) されば女その婢を過失ありしによりて責めたるに、

2) 申二八・一五。
3) 死及びその後のことに就いての正しい見解を持つていれば死にたいと望むのも罪にはならない。
4) 本一・一六参照。
5) アスモデウスとはただ、アツシリア語アスマド「滅ぼす」に由来する、悪魔をさす普通名詞に過ぎない。尤もここではその名が特定の淫蕩の靈をさすのに用いられているが。

之に答えて云いけるは、「汝己が夫等を取り殺す者よ、我等この世に汝の子女を、絶えて見ざらんことを願わしけれ。」^{一〇} 汝既に七人の夫を取殺したる如く、我をも亦取り殺さんとするか。」と。女是に於いてわが家の

高間^一に入り行き、三日三晩飲食せず、二涙ながらに祈禱を續け、天主にこの侮辱より免れしめ給わんことを願ひけるが、^{二三} 三日目に至りて祈禱を終うるや、主を讃えて、^{二三} 云いけるは、「ほむべきかな汝の御名、我等が

父祖の天主よ、汝は怒り給える時にも、御憐憫を施し、患難の際に汝を呼び頼む者の罪を赦し給えば、^{一四} 主よ、わが顔を汝に轉じ、わが眼を汝に向けん。^{一五} 主よ、願わくはこの侮辱の絆より我を解き放ち給え。然らずば必

ずこの世より我を引取り給えかし。^{一六} 主よ、汝は知り給う、我が一度も夫を慕いしことなく、すべての情慾を去りてわが靈魂を潔く保ちたるを。

^{一七} 我は一度も戯るる者と交わらず、輕々しく振舞う者に與せざりき。^{一八} されど夫を迎うることを承諾したるは、汝を畏るる爲にして、わが情慾の爲

1) 婢はサラに

その夫死亡の

責任があると

信じ、罰とし

て、恥辱とさ

れている子の

ないことを望

む。1) 屋上

の離れ室。

8) トピア同様

六節参照。

一九 にあらずの⁹⁾ 然るに或時は我彼等に相應わず、或時は
 汝我を他の夫の爲に豫定し置き給いし故にや、彼等の
 我に相應わざることもありき。¹⁰⁾ 二〇 蓋し汝の御旨は人
 三二 の力の左右し得る所に非ざるなり。三三 されど汝を崇む
 る者はいずれも皆、たとい試みらるるともその生に榮
 冠を與えらるべく、苦しめらるるとも救わるべく、懲
 らしめらるるとも汝の御憐憫に至るを容さるべしと確
 信す。三三 實に汝は、我等の滅亡を喜び給わず、そは嵐
 の後に風を造り、落涙啼泣の後に歡喜を注ぎ給えばな
 三三 り。三三 イスラエルの天主よ、汝の御名は代々に讚美せ
 二四 られさせ給え。」と。二四 その時兩人の祈願、¹¹⁾ 最高き
 二五 天主の榮光の前に聽き容れられて、二五 主の使聖ラファ
 エル¹²⁾、己が祈禱の一時に主の御眼前に復誦えられた

9) 彼女は兩親の命に服して、その選
 擇した婿を迎える。—10) サラの謙遜
 はこの岐路に立つて現れる。また求
 婚者等に下つた天罰は、誰に責があ
 るかを明らかに示した。律法(民三
 六・八)によれば、兩親の獨り子で
 あつたサラのようなあととり娘は、
 その家の財産を後世に傳えるために
 ただ親戚とだけ結婚することになつ
 ていた。俘囚の間はこの規定は適用
 されなかつたが、この場合には律法
 通り結婚を行ふのが、天主の測り知
 られぬ御旨であつた。—11) トビアと
 サラとの祈。—12) ラファは「癒す」、
 エルは「天主」。即ち「天主癒し給う」
 の義。

る彼等兩人を癒さんとして¹³⁾遣されたり。

¹³⁾ サラを悪魔の力から解放し、盲目のトビアに再び視力を與えようと。

第 四 章

トビア死するならんと思ひて、その子に訓戒を與え、またガベルに貸金あることを告ぐ。

一 一 さてトビア、死を得んと己が

祈禱、聽き容れられたりと思ひし

かば、その子トビアをわが許に呼

び寄せ、¹⁾ 之に云いけるは、「わ

が子よ、わが口にす言を聽きて

之を汝の胸に礎石の如くに据え

よ。^三 天主もしわが魂を召し給わ

ば、わが遺骸を埋め、汝の母をそ

第四章

1) 目的は彼をラゲスにやるため。しかし死なせていただきたいという祈がその内に叶えられるか知れないと思つたので、もう再びわが子に逢えないかの如く別れを告げる。

四の生くる日の限り敬うべし。³⁾ 實に汝は、彼女がその胎内に汝のありし爲に經驗せる危険の、いかなるものにしていかばかりなりしかを、憶わざるべからず。
 五されど彼女も亦その壽命盡きなば、之をわが傍に葬るべし。⁴⁾ 汝の生くる日の限り、天主を心に留め、⁴⁾ 慎しみていかなる罪にも同意せず、主我等の天主の御誠命を等閑にするなかれ。⁷⁾ 汝の有てる物の内より施し、汝の顔を貧者に背くことなかれ、さらば主の御顔の汝に背けらるることもあらざるべし。⁵⁾ 八汝力の及ぶ限り、憐憫あれ。⁶⁾ 九汝もし多く有たば、豊かに與えよ、もし有つこと少くば、少きをも快く分たんと努めよ。⁷⁾ 一〇蓋し汝は必要⁸⁾の日の爲に、自ら善き報賞を貯うるなり。二そは施與こそあらゆる。罪と死とよ

2) 出二〇・一二。集七・二九。
 3) 創四九・二九以下参照。一4) トピアが母のことから天主のことに移つたのは、天主への崇敬が親への孝行よりも重要でないからというのではなくて、身近にある者から始めて、次に最も大切なものを擧げるのである。一5) 箴三・九。集四・一。一四一三。路一四・一三。一6) 集三五一一。一7) どの人も自分のことを眞先に考えていい。一8) あらゆる必要、殊に人間がこの世のすべての物から離れなければならなくなり、自分の善業のほかは何も携えて行かれぬ時。詩四〇・一参照。一9) 施しは、たゞ小罪から解き放つだけ。大罪から解放するというのは、ただその赦しの準備をさせ、赦された後には、

一三 一三 施與は、凡て之をなす者にとりて、最高き天

一三 主の御前に大いなる倚頼となるべし。三 わが子よ、あ

一四 こと勿れ。12) 高慢をして汝の心と言葉とを支配せし

一五 なる。13) 汝の爲に何人がいかなる事をなすとも、直

一六 にもその報酬を之に與えよ、汝が雇いし者の報酬を、些

一七 かも汝の許に遺しおくべからず。14) 汝、他人に爲さ

一八 がるを好まざることを、決して他人になさざるよう心

一九 がけよ。15) 汝のパンを飢えたる者、貧困なる者と共

二〇 に食し、汝の衣服を以て裸なる者に着せよ。16) 汝の

二一 パンと葡萄酒とを義人の埋葬に宛て、罪人等と共に之

二二

二三

この世の罰の償いや成聖の聖寵の強
化に役立つとの意。同じ事は、あら
ゆる善業についても云うことができ
るが、同胞に對する憐みは、天主の
御憐みと特別な關係をもつている。

10) 永遠の苦罰。この世の闇、即ち一
時的苦しみはトピアがその施しによ
つてさえ、免かれない。—11) 集二九

・一五。—12) 撒前四・三。—ギリシ
ヤ語本では、このすゝめに、妻は親
戚の中から選ばねばならぬという訓
戒が附加してある。—13) 創三・五。

14) 利一九・一三。申二四・一四。
15) マテオ七・一二。路六・三一。

16) 路一四・一三。

一九

を飲食いんじよくすることなかれ¹⁷⁾ 常に賢者けんしやの勸告すゝめを請こい、

二〇

絶たえず天主てんしゆを讚ほめ稱たよえて、その汝なんじを導みちびき給たまひ、汝なんじの

二一

志こころざしのすべてその中うちに留とどまらんことを願ねがえ。二二 わが子こ

よ、我われまた汝なんじに告つぐ、汝なんじのな幼おきなかりし頃ころ、我われメデア

人びとの市まちなるラゲスにて、ガベルに銀ぎん十タレントを貸かし

二三

與あたえしことあり、その證書しょうしよわが手許てもとにあるなり。二三

れば如何いかにしてその許もとに至いたり、彼かれより前ぜん述じゆつの額がくの銀ぎんを

二三

受うけ、之これにその證書しょうしよを返かえさんかを考かんがえよ。二三 我わが子こよ、

懼おそるるなかれ、實げに我われ等は貧まさしき生活くらしをなせり、され

どもし、天主てんしゆを畏おそれ、一切さいの罪つみを避さけ、善ぜん18) を行おこなわば

我われ等に多おほくの善よきこと19) あるべし。」と。

17) 死者の追悼に饗應を行ふのは、律

法に抵觸していない(耶一六・七)。

ただトビアが、決して追悼の宴に列

席するなと息子を戒めたのは、それ

によつて彼がその際の罪に與し、自

身も責を負うに至るからである。キ

リスト教の初代、葬式の際に食物や

飲物が貧者に施與されたのは、彼ら

に故人のため祈つて貰うためであつ

た。しかしこの風習に異教の迷信が

混入するようになつて、これをやめ

るに至つた。18) 一時的の、しかし

特に永遠の。19) 羅八・一七。

第五章

小トピア旅路の案内者を求めて人の貌を取れる天使ラファエルを得。

一時トピアにトピア、父父に答えて云いけるは、「父よ、汝汝の我我に命命じ給給える所

は、我我悉悉く之之をなさん。二されど如何如何にしてこの錢錢を請求請求むべきか、

我我之之を知らざるなり。彼彼は我我を知らず、我我は彼彼を知らず、何何の徴徴をか我我

彼彼に與與えん。一また我我は彼處彼處に至至らん爲爲取るべき道道すらも辨辨えざるな

り。三と。父父乃乃ち之之に答答えて云いけるは、「現現に我我彼の證書證書をわが手許手許に

有有するにより、汝汝之之を彼彼を示示さば、彼直彼直に返返し與與えん。四但但、今行今行きて

一定一定の報酬報酬もて汝汝と共に赴赴くべき誠實誠實なる雇人雇人を探探ね求めよ。是是、我我が

なお生生ける間に、汝汝そを受け得得んが爲爲なり。五と。やがてトピア出出で行

きけるに、美美しき一人一人の若者若者の、帶帶して恰恰も旅仕度旅仕度をなせる如如きが、立

てるを見出見出したり。六彼彼その天主天主の使使たるを知らず、之之に挨拶挨拶して云い

けるは、「善善き若者若者よ、汝汝は何處何處の者者なるか。七彼彼、「イスラエルの裔裔等

第五章 1) イタラ

譯は「彼が我を認め、我を信じ、

我にその金を與えんために」と

附加している。

證據を見せたらガベルには支拂

いの義務があるが、それがなければ二十年後そ

の金が果して自分の當然の所有

物になるか確か

でなかつた。

八の中なり。²⁾」と答えければ、トビア之に云いけるは、「汝はメデア人の地方
 に至る道を知れりや。」^八 彼答えけるは、「我之を知り、そのすべての道を屢
 く往來せり。また我はエクバタナ山中にあるメデア人の市ラゲスにて、我等
 の兄弟ガベルの許に留まり居たり。」と。^九 トビア之に云いけるは、「乞う、
 我が是等の事をわが父に告ぐるまで、我を待て。」と。^{一〇} トビア乃ち入りて、
 是等の事を悉くその父に語りしに、父それを大いに奇として、そのわが許に
 入り來らんことを願いたり。^{一一} かくて彼入り來り、之に挨拶して云いけるは
 「汝に喜悅常にあれかし。」と。^{一二} トビア云いけるは、「何の喜悅か我にあら
 んや、我は闇に坐せる者にして、天の光をだも見ざるに。」と。^{一三} 若者之に
 答えけらく、「心強かれ、汝の天主より癒されんこと近きにあり。」と。^{一四} ト
 ビア之に云いけるは、「汝わが子をメデア人の市ラゲスにあるガベルの許に
 伴い行くを得んや。歸りなば我汝に一定の報酬を與えん。」^{一五} 天使之に云い
 けらく、「我彼を彼處に案内し、また之を汝の許に連れ歸らん。」^{一六} トビア之

2) 彼はイ
 スラエル
 守護の天
 使たちの
 ひとりで
 あつたる
 う。
 3) 次いで
 案内賃は
 旅行費及
 び帰つて
 からの謝
 禮を入れ
 ずに、一
 日一ドラ
 クマと定
 められた

に應えぬ、「願わくは、汝、いずれの家、いずれの族の人なるかを、我に告げよ。」^{一七} 天使ラファエル之に云いけるは、

「汝が知らんとするは、己が子と同行する雇人の血統のことか⁴⁾ 或は雇人その者のことか⁴⁾ 一八 されど我汝をして不安なからしめん爲に云わん、我は大アナニアの子アザリアなり。」⁵⁾

^{一九} トビア答えけるは、「汝は大家の出なり。されど乞う、わが汝の家柄を知らんとせしことを憤るなかれ。」と。^{二〇} 天使

之に云いけるは、「我汝の子を恙なく伴い行き、また恙なく汝の許に連れ歸らん。」と。^{二一} トビア答えて云いけるは、「旅路安かれ、天主汝等の旅路に在し、その御使汝等に伴わんとを。」と。^{二二} かくて途中携うべきものを悉く用意するや

トビアはその父にも母にも別れを告げて、⁶⁾ 兩人共に旅立ちたり。^{二三} さて彼等の出で發ちし後、その母泣きて、云い出で

⁴⁾ イタラ譯の記事によれば一層明らか。汝にわが血統わが族を知る必要ありや。汝は雇人を一人探ね居るなり。何故わが血統わが族を問うや。」⁵⁾ ここで大天使ラファエルが嘘を云つたとの唯理主義者等の非難はもう陳腐。アザリアは「天主助け給う」、アナニアは「天主は恵み深し」の義。これらのありふれた名前は、ラファエルが自分の別名に用いるのに至極適當である。⁶⁾ ギリシヤ語本「その父母に接吻して」。

けるは、「汝は我等が老年の杖とも頼む者を取りて、我等より去らしめ
 たり。〇⁷⁾ 汝が彼を請求の爲に遣したる、かの錢なかりしならばよかり
 しならんに。〇²⁵ そは我等、貧窮にも満足し、己が子を見て富めりと思ひ
 居たればなり。」と。〇²⁶ トビア之に云いけるは、「泣くなかれ。我等の子
 は恙なく彼處に到り、恙なく我等の許に歸らん、汝の眼彼を見るべし。
 〇²⁷ 蓋は我、天主の善き御使⁸⁾ が彼に伴いて、彼の周圍に起る一切の事を
 善く處理い、かくて彼が喜びつつ我等の許に歸るべきを信ずればなり。」
 〇²⁸ この言を聞くや、その母泣くをやめて黙せり。

第 六 章

天使の勧めにより小トビア襲い來りし魚を捕らう—その心臓と膽汁と肝臓とを醫藥
 として藏す—天使トビアに、ラゲエルの家に宿りその娘サラを娶ることを勧む。

一 かくてトビア出で發ちしが、その犬彼に従いぬ。彼は初の泊りを、チ
 二 グリス河の畔に宿れり。〇¹⁾ 三 さて彼、足を洗わんとて出でしに、折しも

第六章 1) 隊商
 宿に。

7) 本一〇・四。
 8) トビアは天主
 が人間の守護役
 に天使達を任じ
 給うたとの有難
 いお約束を知つ
 ていた。詩三三
 ・八。九〇・一
 一参照。

三 視よ、巨大なる魚²⁾ 現れて彼を呑まんとせり。三 トビア
 怖れて大聲に呼わり云いけるは、「主よ、³⁾ 彼我を襲う。」
 四 天使之に云いけるは、「その鰓を捉えて引き寄せ
 よ。」と。彼乃ちかく爲して、之を陸に引き揚げたれば、
 五 魚彼の足許にて跳き始めたり。五 時に天使彼に云いける
 は、「この魚の内臓を抜き取り、その心臓と胆汁と肝臓
 とを己が爲に貯えよ、蓋し是等は有用なる薬に必要なる
 六 ものなり。」と。⁴⁾ 六 よりて彼かくなしたる後、その肉を
 炙りて彼等旅路に携え、残れる物は之に塩せり、是、彼
 等がメデア人の市ラゲスに至るまで、彼等に足らん爲な
 七 り。七 その時トビア天使に問いて云いけるは、「兄弟ア
 ザリアよ、乞う、汝が我に、魚より取りて貯えよと命じ
 八 たる物は、如何なる効驗あるか、我に告げ給え。」八 天使

²⁾この魚は或る人々の説によれば淡水魚、他の説によればチグリス河に上つて來た海の魚であつた。この魚は、それ自體の様子でなくトビアに見えた通りに記述してある。――³⁾この呼びかけを見ると、トビアが同行者を、既にいくらか雇人以上の者と認めていることがわかる。――⁴⁾この事件はトビアをして、アザリアを人間以上の者と推測させるに十分であつた。天使がまたもや父の回復を豫言したので殊にそうであつた。しかし天使は仕舞まで知られずに通すため、俗間の信仰で、彼に約束の回復をもたらずと思われている薬を教える。

九 九 また膽汁は、白き斑点ある眼に塗るに効あり、その眼
靈を追い拂いて、再び之に近づかしむることなかるべし。

一〇 忽ち癒ゆべし。」と。一〇 トビア彼に云いけるは、「汝は我
等が何處に泊るを欲するか。」と。二 天使答えて云いける

は、「此處に汝の族より出でし親戚にて、ラグエルと名の
る人あり、彼はサラと云う娘を有てるが、その他に男子も

なく他の女子もなし。二三 その財産は悉く汝に歸すべし、さ
れば汝之を妻に迎えざるべからず。一三 故に汝之をその父

より請い求めよ、彼之を汝に妻として與えん。」と。一四 時
にトビア答えて云いけるは、「我聞くに、かの女は七人⁸⁾

の夫に嫁がしめられしに、彼等死せりと。なおまた聞くに

5) 若干の魚の膽汁が眼病に特効ありとは、古人が誰も認めていた所。この魚がいかなる種類のものであつたか調べるのは全く無駄である。なぜならその内臓の治癒力は、その自然の性質によるのでなく、天主のふりぎな御業によるのであるから。

6) ニニヴェから七百キロを隔てたエクバタナに近づいた時。彼らが初の泊りをした上記の場所ではない。一) 7) あととり娘は、ただ同族の中からだけ夫を取ることが許されていたから。民三六・六一一を見よ。一) 8) この七人という数は、たゞ一般に大勢をさすものか。

一五 悪霊ありて彼等を殺したるなりと。9) 一五されば我はこの事の、或は我にも起ることなきやを怖る。しかも我はわが兩親の獨子なれば、彼等の老の身を悲嘆のあまり死の國に下すならん。」と。

一六 天使ラファエル乃ち之に云いけるは、「わが言を聽け、我かの悪霊の倒し得るは如何なる者共なるかを汝に示さん。一七 即ち己と己の心とより天主を締め出し、辨えなき馬や、騾馬の如く己が肉

一八 慾¹⁰⁾に耽らんとて結婚する人々、かかる者共に對してこそ、悪霊は力を有するなれ。11) 一八されど汝之を娶りて閨に入りなば、三日の間己を抑えて女に近づかず、之と共にひたすら祈禱にいそしむべし。12) 一九またその夜には、かの魚の肝臓を燻べよ、さらば悪

二〇 靈は退散せん。13) 二〇第二夜には、汝聖なる太祖等の仲間に加えられん。二三第三夜には、汝祝福を受けて、汝等より息災なる子等

二三 生るるに至らん。14) 二三かくて第三夜過ぎなば、肉慾よりも寧ろ子

9) エデア人達は互いに交通していたので、トピアがこれをニニヴェで、もしくはは旅行の途中にでも聞くことはあり得た。—10) 馬や驢馬に見られるような肉慾
11) これは誘惑及び肉體を害することだけに限る。—12) マテオ一七・二一のキリストの御言参照。—13) 秘蹟の作用が外的な印に附隨してゐるように。—14) 汝の結婚は太祖たちのそれと同様に祝福される。

等を得んとする望みに驅られて、主を畏れつつ處女を享くべし、是、アブラハムの裔たる汝、己が子等に祝福を受けん爲なり。¹⁵⁾

第七章

ラゲエル彼等を歡待すトピア、サラを妻に所望す。

- 一 さで、彼等ラゲエルの許に入りしに、ラゲエル彼等を歡び迎えたり。 二 時にラゲエル、トピアを見てその妻アンナに云いけるは、「この若者の如何にわが甥に似たることよ。」と。 三 かく云いたる後、彼云いけるは、「我等の兄弟なる若者等よ、汝等は何處の者なるぞ。」 彼等之に云いけるは、「我等はネフタリ族にてニニヴェに捕虜たりし者なり。」 四 ラゲエル彼等に云いけるは、「汝等わが兄弟トピアを知れりや。」 彼等云いけるは、「我等之を知れり。」と。

15) 主がアブラハムになし給うた御約束の引用。創二二・一七一八参照。

第七章 1) ギリシヤ語本によれば、ラゲエルの妻はエドナ即ち「歡喜」という名であつた。多分エドナのほかにアンナという呼び名をも有していたのである。

五 彼乃ち之に就きて善き事數多語りけるに、天使ラグエルに向かい
 て、「汝が問いしトビアは、この者の父なり。」と云いしかば、六 ラ
 グエル馳せ寄り、涙ながらに之に接吻し、その頸に縋り、泣きつつ
 七 云いけるは、「わが子よ、汝に祝福あれかし、そは汝、善良にし
 八 ていと優れたる人の子たればなり。」と。八 その妻アンナも、彼等の
 九 娘なるサラも亦泣きたり。九 さて彼等語り合ひし後 2) ラグエル、
 一〇 牡羊を屠りて饗應の用意をせよと命じけるが、やがて彼、彼等を促
 がして食卓に就かしめんとしたる時、一〇 トビア云いけるは、「汝先
 ずわが願を容れて、汝の娘サラを我に與えんと約束し給わずば、我
 二 今日此處にて飲食することあらじ。」と。二 ラグエルこの言を聞く
 や愕き怖れたり、そは娘の許に入りしかの七人の夫等に起りし事を
 三 知りおればなり。さればその彼にも等しく起らざるべきやを怖れ始
 めて、躊躇いつつその願に答を與えざりしに 3) 三 天使之に云いけ

2) イタラ譯では *locu-*
 二 (語りたる) の代り
 に *loti sunt* (洗いた
 る) となつてゐる。
 故にこれはその地方
 の習慣で旅人が到着
 した時もてなしとし
 てその足を洗ひすが
 すがしい氣持にして
 やる、それをさして
 いるのである。
 3) ラグエルが説明せ
 ず成行を仄めかして
 いる十四節を見れば
 わかるように、彼は
 求婚に接すると相手
 に七人の求婚者のこ
 とを話した。

一三 するは、「娘を彼に與うることを懼るるなかれ、汝の娘はこの
 天主を畏るる者に、妻として與えらるべき者なればなり。さ
 ればこそ他の者は之を有し得ざりしなれ。」と。一三その時ラ
 グエル云いけるは、「我は天主がその御前にわが祈願と涙と
 の至るを許し給いしを疑わず、一四それ故にまた、その汝等を
 わが許に來らしめ給いしは、この娘がモイゼの律法に遵いて
 その親戚に嫁がんと爲なるを信ずるなり。されば今、我が之を
 汝に與えんとするを疑うなかれ。」と。4) 一五かくて娘の右手を
 取り、5) トビアの右手に付して云いけるは、「アブラハムの天
 主、イサークの天主、ヤコブの天主、汝等と共に在して、汝
 等を結び、その御祝福を汝等に充滿し給えかし。」と。6) 一六是
 に於いて彼等紙を執り、結婚の契約を認め、7) 一七その後天主
 を讚め稱えつゝ饗筵を開きたり。一八次いでラグエルその妻ア

4) 民三六・六。一5) エデア
 人の墓地では、結婚した人
 々の墓石に握り合つた二つ
 の手が屢々彫りつけてある
 6) 創二四・六〇。得四・一
 一に類似。こゝ並に八・一
 〇、一九。九・一一に云わ
 れている祝福、及び最後に
 ある祝福は、聖會が莊嚴な
 新婦祝福に採用している。
 7) 結婚、及び疑いもなくサ
 ラの持参金に關することを
 確認する行為。八・二四参
 照。

一九 ナを呼び寄せて、他の房⁸⁾を調うることを之に命じたり。一九 母その娘サラを其處に導き入れしに、娘泣きしかば、⁹⁾二〇 之に云いけるは、「わが娘よ、心強かれ、天に在す主は、汝の受けし厭わしきことに換えて、汝に歡喜を賜うなり。」と。

第八章

トビア魚の肝臓の一片を焼き、ラファエル惡靈を封ず—トビア及びサラの祈禱。

一 さて晚餐を攝りたる後、若者を娘の許に連れ行きけるが、^二折しもトビア天使の言を想い起し、その旅囊より一片の肝臓を取り出して、之を熾る炭火の上^三に置きぬ。¹⁾三 時に天使ラファエルかの惡靈を捉えて、之を上エジプトの荒野²⁾に繋げり。³⁾四 かくて後トビア處女に勧めて之に云いけるは、「サラ、起き

8) サラの普段の寢室のほかのか、或は彼女が前の夫達と不幸に逢つた部屋のほかのか。—9) おもに、トビアも前の婚約者達と同様になるだろうと心配して。

第八章 1) これを燻べて惡靈を逐い拂うことができたのは、ただトビアの従順と天主に對する信頼とのおかげ。
2) この荒野テバイスは、キリスト教の時代には幾多聖なる隱修士の隱棲の場所、惡魔の軍勢との鬭争の現場となつた。—3) 惡靈の本當の居所は地獄であるが、彼らがそこへ閉じこめられるの

一〇 よ、我等今日と明日と明後日と、天主に祈らん、其はこの三
 五 夜に亘りて、我等天主に一致し奉るべければなり。しかして
 第三夜過ぎなば、我等夫婦の契を結ばん。蓋し我等は聖者
 の子⁴⁾なれば、天主を知らざる異教者等の如く、交るを得ざ
 六 るなり。」と。彼等乃ち共に起き上り、兩人齊しく心をこめ
 七 て、己等の身に恙なからんことを祈りけるが、セトビア云い
 けるは、「主我等の父祖の天主よ、天も地も、海も泉も河も、
 八 またその中にある、汝の創造り給いしすべての物も、汝を讚
 九 め稱えよかし。」⁵⁾ 汝は地の粘泥よりアダムを創造り、エワ
 を補佐者として之に與え給えり。⁶⁾ 九されば今、主よ、汝は知
 り給う、我がわが姉妹¹⁾を迎えて妻となすは、わが肉慾の爲
 に非ず、ひたすら子孫を望む故にして、之によりて汝の御名
 を代々に讚えんとするなり。」⁸⁾ 一〇サラも亦云いけるは、「主

はただ審判の日の後。その
 前には天主が御自分の御旨
 に使うため、この世に現わ
 れることを彼らに許容し給
 う。—⁴⁾ 選ばれた人々の裔。
⁵⁾ 人間は自分だけでは天主
 に應わしい讚美を獻げること
 とができないので、自分と
 共に至高者を讚め稱えるよ
 う、あらゆる被造物に求め
 る。—⁶⁾ 創二・七と一八以
 下。—⁷⁾ 聖書では「姉妹」
 という語に、もつと遠い親
 戚も含まれている。—⁸⁾ 結
 婚の最も遠大な目的は、天
 主の讚美者を殖やす所にあ
 る。

よ、我等を憐み給え、我等を憐みて、我等兩人を、無事息災に老いしめ給え。」と。9) 二やがて、鶏鳴く頃となるや、ラゲエル命じてその僕

等を來らしめたり、彼等乃ち彼と共に、墓を掘らんとて出で行きぬ。

二三 蓋し彼「恐らくは女の許に入りし他の七人の夫に起りし事、彼にも

同じく起りしならん。」と謂いしなり。二三 彼等穴を調うるや、ラゲエ

ルその妻の許に歸り來りて、之に云いけるは、一四 汝の婢の一人を遣

して、10) 彼死せりやを視しめよ。我日出ずる前に之を葬らんとす。」

と。一五 よりて妻、その婢の一人を遣しけるが、婢閨に入りて見たるに

彼等無事息災にして共々に眠れり。一六 婢歸りて良き音信を告げしかば

ラゲエルとその妻アンナ、即ち主を讚め稱えて、一七 云いけるは、「主

イスラエルの天主よ、我等汝を讚美し奉る、そは我等の想いし如き事

起らざりしが故なり。一八 實に汝は我等に御憐憫を垂れて、我等を責め

たる敵を我等に近づけず、一九 また獨子二人11) を憐み給えり。主よ、彼

等

9) ラゲエルはトピアも他の求婚者等同様死ぬことを恐れ、それにより悪い噂の立つのを心配して、その場合には誰にも知られぬよう、暗い内に埋葬しようと思つた。10) 注意すべき點はラゲエルが妻を通じて婢に命令を下させるといふ所。11) トピアは一人息子、サラもその兩親の一人娘。

二〇 等をしてますます汝を稱えしめ、彼等が無事なりし故に、汝に對する讚美の犠牲を、汝に捧げしめ給えかし、是、萬の國民がたゞ汝獨り全地の天主にて在すことを知らん爲なり。」と。二〇 是に於いてラゲエル直にその僕等に命じて、彼等の造りたる墓穴を夜明前に再び填めしめ、三その妻に向かいては、饗筵を設け¹²⁾ 且旅する者に必要なる一切の食物を用意せよと云いたり。三三 彼また肥えたる牝牛二頭と、牡羊四頭とを屠らしめ、そのすべての隣人とそのすべての友との爲に饗應の仕度をなさしめたり。三三 またラゲエルはトビアに、己が許に二週間留まらんことを懇願せり。二四 更にラゲエル、その有てるすべての物より、半を割きてトビアに與え残る半も亦己等の死後トビアに歸すべしとの證書を作れり。¹³⁾

12) 通常富裕な家では婚禮祝いを七日間続行した(創二九・二七。士一四・一二)。しかしラゲエルは娘が不思議に救われて同族の者に嫁ぐのが嬉しくて、仕來りの期間の倍にしよらとした。— 13) 七・一六のものとの契約はこれより不利な条件であつたらう。ラゲエルは嬉しさのあまり、それをもつと有利にした。

第九章

天使ラファエル、ガベルの許に到りて錢を受取り、彼を伴いて婚筵に来る。

一時にトビア、人間と思える天使を呼び寄せて、之に云いけるは、

「兄弟アザリアよ、乞う、わが言を聽け。我たといわが身を汝に獻

げて下僕となるとも、汝の配慮に應わしく報ゆること能わざるべし。

三 さりながら、乞う、汝家畜等と僕等とを伴いて、メデア人の市ラゲ

スに在るガベルの許に行き、これに彼の證書を返して彼より錢を受け

取り、且彼に請いてわが婚筵に來らしめ給え。蓋しわが父が日を算

えつつあるは汝も知る所なり、我一日遅れなば彼の魂は悲しむなら

ん。汝はまたラゲエルが如何に我に懇願せしかをも見たり、我はそ

の切願を却け得ざるなり。」と。是に於いてラファエル、ラゲエルの

僕等の中より四人と、駱駝二頭とを伴いて、メデア人の市ラゲスに赴

き、ガベルを見つけて之にその證書を返し、彼より錢をすべて受け

第九章 1) エクバ

タナはラゲスから三十七マイル程の所にあるから、その間の旅に四日かかることもあつた。天使がなるべく早く出發しなければならなかつたのは、そうしないと、ガベルに對する招待が水の泡になるから。1)のガベルに逢つて。

七 取り、且之にトビアの子なるトビアの身に起りしことを悉く物語り、彼をし
 八 て、己と共に婚筵に來らしめたり。八さて彼ラグエルの家に入りて見たるに、
 九 トビア食卓に即きおりしが、忽ち跳び立ちて、彼等互に接吻せり。時にガベル
 泣きつつ天主を讚め稱え、且云いけるは、「イスラエルの天主は汝を祝し給え
 かし、そは汝、義しくして天主を畏れ、また施與をなすいと優れたる人の子な
 一〇 ればなり。一。汝の妻にも汝の兩親にも祝福下れよかし、二願わくは汝等が、汝
 等の子等と、汝等の子等の子等を、三四代に至るまで見んことを、³⁾ また汝
 等の裔が代々に統治し給うイスラエルの天主より祝せられんことを。」と。
 一一 一同「アメン」と唱えて饗宴に赴きしが、彼等結婚の宴會をも天主を畏れつ
 つ行いたりき。

第十 章

トビアの兩親わが子の不在長きに亘るを悲しむトビア、サラと共に家路に就く。

一 さてトビア婚姻の爲に遅れしかば、その父トビア憂いて云いけるは、「汝、わが子の

3) 因みに聖會が新郎新婦のためのミサ中の祝福の言葉を思い合せよ

二 遅るるは何故なにゆゑと思おもうや、また彼かれのかの地ちに引留ひきとめらるるは何故なにゆゑぞ。 三 或あるはガベ
 三 ル死しして、錢かねを返かえす者ものなきに非あらざるか。』と。 四 かくて彼かれいたく悲かなしみ始はじめしが
 四 その妻つまアンナも彼かれと共に然しかなして、兩り人にん等ひとしく泣なき始はじめたり、是これ、その子こ定さだめ
 四 の日ひにも彼等かれらの許もとに歸かえり來きたらざりしが故ゆゑなり。 五 されば母はな泣なく泣なく涙なみだ堰だきあ
 四 えずして云いけるは、「ああ我われは禍わざわいなるかな、わが子こよ、汝なんじ我等われらの眼めの光ひかり、汝なんじ
 五 我等われらが老年ろうねんの杖つえと頼たのむ者もの、汝なんじ我等われらが生涯しやうがいの慰安なぐさめ、汝なんじ我等われらが子孫こらの希望きぼうよ、我等われら
 五 は何なにとて汝なんじを外國とくこくに遣つかしたるぞ。』 六 我等われらは汝なんじ一人ひとりの中うちに、一切さいを併あせ有ゆうせるな
 六 れば、我等われらの許もとより汝なんじを去さらしむべからざりしものを。』と。 七 トピア之これに云い
 七 けるは、「黙もくせよ、愁うれうることなかれ、我等われらの子こは無事ぶじなり、我等われらが彼かれを遣つかす
 七 に同行どうこうせしめたるかの人ひとはいと頼たのもし。』と。 八 せされどアンナは如何いかにしても心こころ
 七 慰なぐさまず、日毎ひごと走り出いでて四方ほうを見廻みまわし、また子この歸かえり來きたるべき希望のぞみありと見みゆ
 八 る道みちをば、悉ことごとく徘徊はいかいせり。是これ、能あたうべくんば、彼かれの來きたるを遙はるかより見みんとてな
 八 り。 九 然しかるにラグエルその婿むこに云いけるは、「此處ここに留とどまれ、』 十 我われ、汝なんじの父ちちトビ

第十章

1) 少く

とも大

体の時

日。

2) 本五

二三。

3) なお

数日。

アの許もとに、汝なんじらが無事ぶじなりとの消息しようそくを遣おくらん。」と。九トビア之これに云いいけるは、「我われはわが父ちちわが母ははの既すでに日ひを算かぞえて、その胸きゆう中ちゆう、心こころ甚はなはだ痛いためるを知るなり。」と。一〇さてラグエル言ことばを盡つくしてトビアに乞こいしも、彼かれ敢あえて聽きかんとせざりしかば、之これにサラ及び所有もちものの半なか、即すなわち僕しもべ、婢しもめ、羊ひつじ、駱駝らくだ、牝牛めうしと、多おほくの錢かねとを與あたえ、彼かれをして恙つじがなく歡よろこび勇いさみて發たたしめけるが、二その時とき云いけるは、「主しゆの聖せいなる天使てんし、旅路たびじに汝等なんじらと共にありて、汝等なんじらを無事ぶじに導みちびけよかし、願ねがわくは、汝等なんじらがその兩親りやうしんの萬事ばんじに幸福こうふくなるに接せつせんことを、またわが死しする前まえに、わが眼め汝等なんじらの子等こどもを見んことを。」と。二三かくて兩親りやうしん、已等おのれらの娘むすめを抱いだきて之これに接吻くちづけし、さて行ゆかしむるに當あたり、二三その舅しゆうと姑しゆうとめを敬うやまい、夫おつとを愛あいし、家人かじんを宰つかさどり、家いえを治おさめ、誹謗そしりを受けざるよう身みを持じせよと、之これを誡いましめたり。5)

4) Vaccis 「牝牛」は、イタラ譯にある

Vasis 「什器類」の書

き違いであるう。

5) ここにあるよりも少い語で、初心の主婦の義務や徳を要約することは殆ど不可能であるう。多二・四―五参照。この言葉を「若き夫妻のかゞみ」と稱する。

第十一章

トビア父の眼に魚の胆汁を塗りしに、その視力回復す。

一 一さて彼等家路に就き、十一日目にニニヴェへの途の半程にあるカラシ¹⁾に到りしに、天使云いけるは、「兄弟トビアよ、汝は如何に汝の父を遺し來りしかを知れり。故に汝の意に適わば、我等先に行き、家の者をして汝の妻及び家畜と共に、我等の後を徐るに追わしめん。」と。彼はこの行くことを喜びしが、その時ラファエル、トビアに云いけるは、「かの魚の胆汁の一部を身に携え行け、蓋し之を要することあらん。」と。トビア乃ちその胆汁の一部を取りて出で發ちたり。五さるほどにアンナ、日毎²⁾に山の頂なる道の邊に坐しいたるが、其處よりは遠方を見渡し得たるなり。かく彼の來るやをその處より見張れる折しも、遙かに之を見て、直にその子の來りしを知りしかば、馳せ行き、その夫に告げて云いけるは、「視よ、汝の子來る。」と。七時にラファエル、トビアに云いけるは、「汝、己が家に入りなば、直に主

第十一章

1) アツシ
リアカメ
デアにあ
つた最早
知られて
いない町
2) 終日
なく、多
分日に何
度も。

八 汝の天主を拜して之に感謝し、汝の父に近づきて之に接吻し、八また直に汝の携えおるかの魚の胆汁を、彼の眼に塗れ。蓋は必ずその眼立所に開けて、汝の父天の光を見、また汝を見て喜ぶべければなり。」と。九折しも共に旅したりし犬、先に馳せ行き、恰も吉報を齎したるかの如く到るや、その尾を振りて喜べり。一〇盲なる父立ち上り、足も跚きつつ走り出で、一人の童に手を取らせて、急ぎわが子を迎え、二之を抱きて接吻し、その妻も然なしけるが兩人歡喜のあまり泣き始めたり。二三かくて彼等天主を拜し、之に感謝したる後、共に坐せり。二三時にトビア魚の胆汁を少しく取りて、その父の眼に塗り

一四半時ほど待ちしが、やがて白き斑点、卵の膜の如くその眼より剝げ落ち始めたり。一五トビア之を摘みてその眼より除きしに、彼忽ち視力を回復したれば、一六彼も、その妻も、彼を知れるすべての人々も、天主を讚め稱えたり。一七即ちトビア云いけるは、「主イスラエルの天主よ、我汝を稱え奉る。其は汝我を懲らし給い、また我を癒し給いたればなり。視よ、我にわが子トビ

魚の胆汁に治癒の効力があるにしても、かように迅速に視力を回復したのは奇蹟である。彼は懲らしめをも恵みとして感謝する。

一八 ア見ゆ。」と。一八かくて七日の後には、その子の妻も、すべての家の者も亦、家畜と駱駝と、妻の多くの錢と、更にガベルより受取りし錢をも携えて、恙なく到着せり。一九 彼乃ち天主が彼を案内したる人によりて、彼に施し給える恩恵を、悉くその兩親に物語りぬ。5) 二〇 トビアの從兄弟なるアキオル及びナバトも、喜びてトビアの許に來り、天主の彼に示し給える諸々の善事に就きて、彼に祝詞を述べたり。三次いで彼等七日の間祝宴を張り、いずれも大いに喜び樂しめり。6)

5) トビアは自分の經驗したことを、サラの到着後に始めて話したのではなかつた。されば本節は前節と關連さすべきではない
6) 一八章註一二参照。

第十二章

ラファエル自らを明かす。

一 その後トビアその子を己が許に呼び寄せて、之に云いけるは、「汝と共に來れるかの聖き人に、我等何をか與うるを得べき。」ニトビア答えてその父に云いけるは、「父よ、我等如何なる報酬を彼に與うべきぞ。さればとて何を以てかその恩に報いるを得ん。三 彼我を導きて恙なく往復せしめたり。彼ガベルより錢を受け取り、彼我に妻を持たせ

彼之より惡靈を追い拂いて、その兩親を喜ばせ、彼わが身の魚に吞
 まれんとしたるを救い、また彼汝をして天の光を見るに至らしめた
 り。かく我等彼によりて諸々の善事を溢るるばかりに加えられたれ
 ば、我等何を與うればとて、之に應わしきを得んや。四されど乞う、
 わが父よ、凡て齋らされし物の半を受納むることもあらんか、彼に
 願ひ見よかし。」と。五是に於いて彼等、即ち父と子と、彼を呼び
 て傍に連れ行き、彼等の齋したる物の半分を受納め給わんかと願ひ
 始めたるに、六彼その時祕かに、七彼等に云いけるは、「汝等天主を讚
 め、生きとし生ける物の前にて彼を稱えよ。其は彼汝等に御憐憫を
 垂れ給いたればなり。七蓋し王の祕密を守るは善き事なれど、天主
 の御業を顯し讚むるは畏し。八斷食と施與とを以て祈るは、黄金の
 寶を積むに優る。九其は施與は死より救い、また之は罪を淨めて
 憐憫と永遠の生命とを獲しむればなり。一〇されど罪と不義とを行

第十二章 1) 天使は

天主のトビア一家に
 對する恵み深い御導
 きに關する御計畫を
 彼らに打ち明けた。
 2) 斷食と施しとは、
 快樂及びこの世の財
 寶への執着など、信
 心の障碍を除去する
 心は祈禱によつて天
 主の御許にまでも揚
 がる。3) 我々は靈
 魂、肉身、所有物、
 この三種の財によつ
 て罪の償いをせねば
 ならぬ。所有物とい
 う財からは施しによ
 つて、肉身という財

二 者は、己が靈魂の敵たるなり。二されば我汝等に
 真相を明して、汝等に祕事⁴⁾を蔽さじ。二三汝が涙な
 がらに祈り、死者を葬り、また汝の食事を措きて、
 晝は死者を己が家に隠し、夜は之を葬りし時、我汝
 一三の祈禱を主に献げたり。5) 一三しかして汝天主の御意
 に適いしかば、試鍊汝を證する必要ありしなり。6)
 一四さればこそ今主は我を遣して、汝を癒し、汝の子
 一五の妻サラを悪靈より解き放ち給いしなれ。一五我は即
 ち天使ラファエルにして、主の御前に立つ七位の中
 一六の一なり。7)と。一六彼等之を聞くや、愕きて戦きつ
 一七つ地に平伏したり。一七然れども天使彼等に云いける
 一八は、「汝等に平安あれ、懼るることなかれ。一八夫れ、
 わが汝等と共に在りしは、天主の御旨によりたるな

からは斷食によつて、離脱せねばならぬが、靈魂という財からは自分の力で離脱することはできない、なぜなら我らはこれによつて天主の御意に適うようになるのであるから。我々はこれを祈禱によつて達成するよう努めねばならぬ。1) 4) 本當の祕事は一五節に記してある。1) 5) ミサ聖祭中司祭は「願わくはこれらの献物を、汝の聖なる天使の手によりて、汝の神聖なる御稜威の尊前に運ばしめ給え。」と祈る(ミサ典書聖變化後参照)。1) 6) 苦しみや試鍊に少しも逢わぬ人は、聖徳の点で何か欠けている所がある。これを解する人は甚だ少い。1) 7) 位の点で最高の天上の靈の一つ。黙一・四。五・六。八・二参照。またミカエル、ガブリエルと共に三大天使の一つ。

一九

り、彼を稱え、彼に讚歌を唱えかし。一〇 實に我は汝等と共に

且食し且飲む如く見えしかど、わが味わいしは、目に見えざ

る食物と飲物となれば、人之を見る能わず。一〇 今こそ我を

遣し給いし者の御許に、わが歸り行く時なれ。されば汝等天

主を讚め、そのすべての奇しき御業を語り傳えよ。」と。

二 彼かく云い終るや、彼等の眼前より消え失せしが、彼等累

ねて彼を見ること能わざりき。三 それより彼等三時の間平伏

して、天主を稱えけるが、起ち上りてその奇しき御業を語り

傳えたり。

第十三章

老トビアの讚美。

一時に老トビア、口を開き、主を讚美して云いけるは、一「主

よ、汝は永久に偉大なるかな、汝の治世は萬代に亘らん。

一) 飲食物を攝るのが快いと
同様、天使達が天主を眺め
るのを、彼等の飲食物と稱
することができると。

第十三章 一) 天主の御憐憫
に對する老トビアの讚美歌
フイリオンはこれを九段に

二 蓋し汝は懲せども癒し給い、陰府に下せども
 引上げ給いて、²⁾ 誰も汝の御手を遁るる者なき
 なり。³⁾ イスラエルの裔等よ、主を讚め、異邦
 人等の眼前にて之を稱え奉れ。⁴⁾ 其は、主を知
 らざる諸々の民の中に、主が汝等を散らし給い
 しは、汝等が主の奇しき御業を語り傳えて、主
 の外に全能なる天主また非ざることを彼等に知
 らしめ給わんが爲なればなり。⁴⁾ 主は我等の罪
 科の爲に我等を懲し給いたれど、その御憐憫の
 爲に拯い給うべし。⁶⁾ さればその我等に對して
 爲し給える所を見て、畏れ戦きつつ之を讚め、
 汝等の行爲によりて永遠の王を顯揚せよ。⁵⁾ 七さ
 れど我はわが捕囚の地にありて主を稱え奉らん

分けている。第一段は一―二節。第二段は
 三―四節。第三段は五―七節。第四段は八
 一―一〇節。第五段は一一―一二節。第六段
 は一三―一五節。第七段は一六―一八節。
 第八段は一九―二〇節。第九段は二一―二
 三節。―²⁾ 汝は生死を掌り給う主なり。陰
 府へ下す者とは死を意味す。―³⁾ すべての
 人間の創造主ゆえ。―申三二・三九。母上
 二・六。智一六・一三。―⁴⁾ 異教徒の中に
 散らされたのは、イスラエル人にとりその
 罪、殊に偶像禮拜に對する罰であつたが、
 天主はその他民族との混合を利用して、御
 名の榮えの發揚と、イスラエル人自身の改
 心と、幾多異邦人の救靈とに資し給うた。
⁵⁾ 正しい讚美には、まず行為において讚美
 する相手のお方の御旨に適うことが必要で
 ある。

一七	一六五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八
<p>る人々は祝せらるべし。一七されど汝は汝の子等に喜ばん、其は彼等</p>	<p>蔑む者共は呪われ、汝を罵る者共は皆罪に定められん、但汝を建つ</p>	<p>に來り、禮物を齎して汝の中に主を拜し、汝の地を聖なりとせん。8)</p>	<p>の捕囚人を汝の許に召還し給い、汝代々に喜ぶを得ん。一三汝は榮あ</p>	<p>遠の天主を稱えよ、さらば主はその幕屋を再び汝の中に建て、すべて</p>	<p>行爲の爲に汝を懲し給いしなり。二三汝の善事に對して主をほめ、永</p>	<p>主に感謝せよ。二天主の都イエルサレムよ、主は汝の手の爲せる</p>	<p>とを信じつゝ然せよ。九されど我とわが魂とは、主に於いて喜ばん。</p>	<p>其は罪の民に御稜威を顯し給いたればなり。八されば罪人等よ、立</p>

6) 選ばれた民族イスラエルに屬する人々
 7) 一一—三節に出
 てくるイエルサレム
 は、まずトビアがそ
 の復興を預言者の如
 く未然に目のあたり
 見て豫言した、ユデ
 アの都と解すべきで
 あるが、次にはそれ
 を前表とする聖會、
 また最後には選ばれ
 た者の榮ある永遠の
 故郷たる天國を意味
 している。—8) 賽六
 〇・五。

一八 皆祝せられて、主の御許に集めらるべければなり。9) 一八 福なるかな、すべて

一九 汝を愛する者、すべて汝の平安を喜ぶ者。一九 わが魂、主を讃め稱え奉れ

二〇 其は主我等の天主、その都イエルサレムを諸々の憂患より放ち給いたれば

二〇 なり。二〇 わが胤の中に、生存えてイエルサレムの榮ゆるを見る者あらば、

二一 我福ならん。二一 イエルサレムの門は青玉と緑玉とにて建てられ、また

二二 その周圍にある石垣は全て價高き寶石にて築かれん。10) 二二 その街衢はいず

二三 れも白くして淨き石もて鋪きつめられ、その街路にては人々アレルヤを唱

二三 わん。二三 かくも之を高め給いし主は讚美せられさせ給え、願わくはその代

二四 々に之を統治し給わんことを、アメン。」

第十四章

老トピアの豫言—小トピア一家を擧げてラゲエルの許に帰り、幸福に生を終う。

一 是に於いてトピアの頌詞終りぬ。さてトピアは目明きたる後、四十二年生存えて、そ

二 の孫等の子等を見たり。二 かくて彼、百二歳に及び、禮を厚うしてニニヴェに葬られた

9) 異教徒が聖會に入ることで成就する。

10) 黙示録に類

似。—黙二一・一九。

三 三即ち彼は五十六歳にして視力を失い、六十歳にして再び之を
 四 得たるなり。一四その餘生を悦びて過し、彼天主畏敬の念を大いに深
 五 うして安らかに逝きしが、五その臨終の時、その子トビア、及びそ
 六 の子等なる若き孫等七人を呼び寄せて、彼等に云いけるは、六二ニ
 七 ヴエの滅亡近づきたり。蓋し主の御言にして果されざるはなし。二
 八 イスラエルの地を離れて散々になりたる我等の同胞は、再之に歸り
 九 往かん。三七その見棄てられし地は再び民もて充滿され、その中
 一〇 りて焼かれし天主の家は再び建てられ、天主を畏るる者、皆彼處に
 一 歸らん。八また異邦の民はその偶像を棄て、イエルサレムに來りて
 二 その中に住まい、九地上の王等は之を喜びて、イスラエルの王を拜
 三 せん。一〇さればわが子等よ、汝等の父の言を聽け、誠を以て主に事
 四 え、その御意に適う事をなさんと努むべし。二また汝等の子等を誠
 五 め、彼等をして義を行わしめ、施與をなさしめ、天主を忘れざらし

第十四章 一) 寫本に

よつてこの年の数が
 違ふ。理由は筆寫し
 た人の不注意。

二) 翁三・七参照。ニ

ニヴエの滅亡をトビ
 アが知り得たのは、

ただ天主の御照らし
 によつてのみ。

三) 喇三・八。一四) 異

教徒が偶像を棄てた
 後住むイエルサレム
 は、キリストの教會。

その中で禮拜せられ
 給う「イスラエルの
 王」はキリスト。

二二 め、如何なる時にも誠を以て力の限り之を讃えしめよ。二三 されば今、子
 等よ、わが言を聽きて、此處に留まるなかれ、他日汝等墓を同一にして
 二四 汝等の母をわが傍に葬りなば、足を外に向けてこの地を去るべし。二三 實
 にその邪惡之が滅亡を招くべきを我は見るなり。」と。一四 さてその母の
 死したる後、トビアはその妻と子等と子等の子等と共に、ニニヴェを去
 一五 りて、舅と姑との許に歸り、一五 彼等の高齡ながら健かなるを見出しけ
 るが、彼は彼等を劬り、彼等の眼を閉じ、ラグエル家の全ての遺産を嗣
 一六 ぎて、五代に亘る子孫を見たり。一六 かくて彼主を畏れつつ九十九年⁵⁾を
 一七 畢えしかば、人々悦びて⁶⁾之を葬りたり。一七 またその全ての親戚とその
 一族全部とも、善き生活と聖き行狀とを續けしかば、天主にも人にも、
 その地のすべての住民にも歡び迎えられたりき。

5) ギリシヤ語本
 によれば小トビ
 アは百二十七歳
 であつた。故に
 こゝにある九十
 九年とは結婚の
 時から数えたも
 のである。

6) この悦びは高
 齡とその生涯が
 有徳で模範的で
 あつたため。